

Forex

株式会社 ジャパン
エコノミックパルス

〒103-0007

東京都中央区日本橋浜町

2-33-5

Tel 03-5962-3910

Fax 03-5962-3913

www.j-pulse.co.jp

info@j-pulse.info

Market Insight

2023年6月5日（月）

全般円安、持続余地と反動調整にらむ

来週「米欧日」中銀会合、リスク選好の余地など焦点

今週の為替相場は一般的な円安と外貨高について、持続余地と反動調整をにらんだ展開が想定される。週間予想はドル/円が138.30-141.30円、ユーロ/円は148.00-151.30円。前週は日本の当局による円安牽制や米指標の悪化などにより、円高とドル安が進む場面があったが、前週末にかけては米債務上限合意案の進展や米雇用統計の改善などで円安とドル高の基調が維持されている。今週は来週の米欧日の中銀政策会合を巡る思惑や、リスク選好相場の持続余地などが焦点になる。

米10年債金利、13・26・52週線の上抜け維持

今週の為替相場で注目されるのは、来週の米欧日の中銀会合を巡る思惑だ。米国ではFRBによるFOMCが、6月13-14日に予定されている。前週はFRBの副議長に指名されているジェファーソン理事が、「FOMCが経済見通しを精査する時間を持てるよう、6月会合では金利据え置きに傾いている」と示唆した。同時に最新5月分のISM製造業景況指数などが悪化となり、6月の利上げ見送りやその後の利上げ停止観測が高まる場面が見られている。

しかし、前週末2日の米雇用統計では、雇用者数の伸びが加速する一方、失業率は上昇の悪化、賃金は伸び鈍化という、強弱入り交じる内容が示された。CMEグループによると、米国市場2日午後の時点でFF金利先物は13-14日FOMCで利上げを見送る可能性を70%とみている。1日の80%からはやや低下した。その後については、7月末までの利上げ確率が再上昇となっている。

先行き不透明感が高まっているが、これまでFRBによるインフレ対応の遅れを批判してきたサマーズ元米財務長官は2日、FOMCが6月会合で利上げ見送りを選択した場合、7月会合では「0.5%の大幅利上げ」という可能性を残しておくべきだと述べた。

そうした中、13-14日にかけては米指標や要人発言、マスコミ報道などにより、6月の利上げ見送り観測や6月以降の利上げ終盤入りの思惑などが高まると、ドルの上値抑制やドル安の材料となりやすい。反対に6月の利上げ継続観測や、6月見送り後の7月利上げ再開などが強く意識されてくると、ドル下支えやドル高の要因となる。

為替相場のドル/円に影響を及ぼすのが、米10債金利の動向だ。前週は金利が低下したあと、小幅な再上昇となっている。週足テクニカルでは前週末時点で、13週、26週、52週の各移動平均線を全て上抜け維持している。26週線についてはトレンド方向を示す方向角度が、3月以来の上向き化へと回帰してきた。

前週までのように米10年債金利の下限切り上がり維持されている限り、ドル/円では「調整的なドル安が入っても、ドルの下限自体は切り上がり」というドル高基調が支援されやすい。その他の注目ポイントは以下の通り。

<週足、ドル/円は5週平均の維持焦点>

為替相場の短中期トレンド判断で参考になるのが週足テクニカルだ。ドル/円

WARNING! 記事並びに情報はすべて株式会社ジャパン
エコノミックパルスに帰属しています。無断転載及び転送
は法的に罰せられますのでご注意ください。



〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-33-5 マリオン浜町ビル
TEL (03) 5962-3910 FAX (03) 5962-3913
E-Mail info@j-pulse.co.jp URL http://www.j-pulse.co.jp
発行責任者：上坂 郁 編集長：原田 祥二

は3月24日週からドルが反発となっているが、6月5日アジア市場時点のレート数値によると、「5週移動平均線を中央値としたボリンジャーバンド」では、5週平均138.83円前後の上抜け維持が焦点になっている。

上下動を経ながらも、上抜け維持している限りは、ドルの下限切り上がり基調が継続。週間ベースのドル上値メドとしては、バンド上限142.55円前後やその上の方向が視界に入る。反対に5週線などを完全に下抜けると、ドルの上値の重さが確認され、バンド下限135.11円前後の方向へのドル安余地が意識されていく。

クロス円取引は3月24日週以降、外貨反発と円反落の基調が続いている。ユーロ/円、ポンド/円、スイス・フラン/円、カナダ・ドル/円、豪ドル/円、NZドル/円などでは、「5週や6週移動平均線の上抜け維持」が焦点になっている。上抜け維持の限り、引き続き外貨高の基調が持続。反対に3月以降の外貨高の反動調整などにより、各ラインなどを完全に下抜けると外貨安の基調入りが意識される。

<来週にECB理事会、政策動向にらむ>

今週の欧州市場では、来週15日のECB理事会をにらんだ展開となる。前週1日に公表されたECB5月理事会の議事要旨では、「コアインフレ率については、最新の展開は懸念材料だとの認識が広く共有された」ことが明らかになった。前週はラガルドECB総裁が、「基調インフレがピークを付けたという明白な証拠はない」などと発言している。

こうした根強いインフレ上昇警戒もあり、15日の理事会に向けては利上げ継続の観測がユーロの下支えやユーロ高の材料となる。ECB理事会というイベントを警戒したポジション調整も、短期的なユーロ上昇の要因として注視されそうだ。

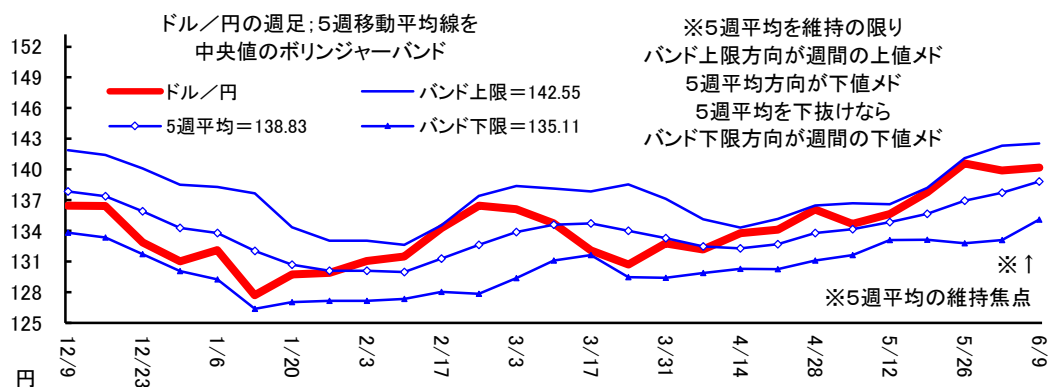
一方で前週1日には、ユーロ圏の5月CPI（消費者物価指数）でコアインフレが予想や前回を下回る低下となった。前週にはECB理事会メンバー、ビルロワドガロー仏中銀総裁から「まだ行わなければならない利上げは比較的小規模で、利上げの行程の大半は完了している」といった発言が見られていた。先行きECBの利上げ停止や来年利下げの思惑は残存しており、ユーロは対ドルなどで15日理事会を前に調整的な買い戻しが入っても、中長期スパンで戻り売り圧力の強まりや上限の切り下がりが注目されやすい。

<来週に日銀政策会合、政策動向にらむ>

今週の日本市場では、来週15-16日の日銀政策会合をにらんだ展開となる。前週5月30日には急速な円安スピードに対し、財務省と金融庁、日銀が、国際金融市場に関する3者会合を開催。昨年到现在、過度な為替変動には「適切に対応していく」方針が示された。

今週は来週の日銀会合への警戒感もあり、円安が進む局面では、日本の当局幹部による円安牽制発言や先行き円安阻止介入の可能性、日銀による緩和修正の思惑などが、ドル/円とクロス円での円高・外貨安の要因として注視される。

一方で岸田政権では新たな経済財政運営の指針（骨太方針）について、16日に閣議決定の方向となっている。昨年到现在「日銀には、2%の物価目標を持続的・安定的に実現することを期待」という共同声明が明示されるほか、今回は新



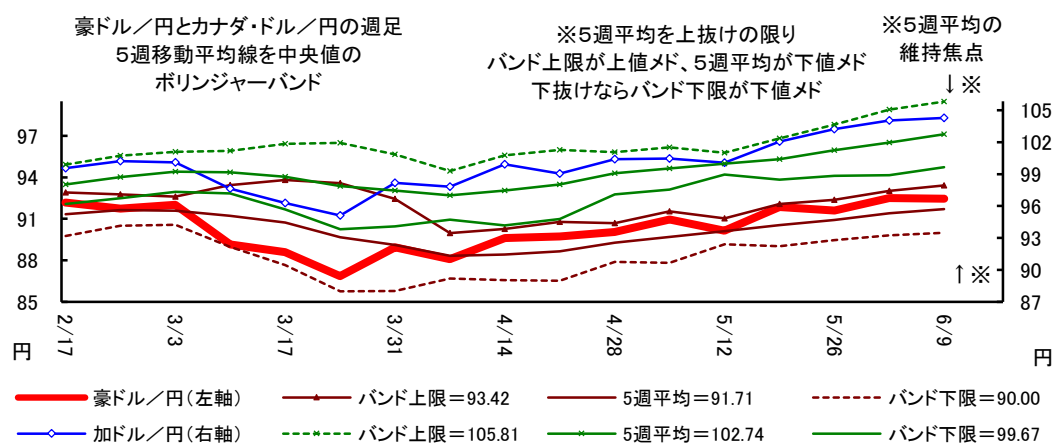
たに「賃金の上昇を伴う形で」が追記の方向とされる（2日ロイター）。今年4月以降の新年度は今春の春闘での賃上げにより、賃上げが広がっているが、それでも日銀はしばらく「持続的な定着の可能性」を見極める必要がある。

こうした政府との共同声明は、日銀による「円安阻止対応」を含めた緩和修正に制約をもたらす。しかも政府の骨太方針は16日の予定であり、日銀の緩和修正や修正の地ならしには間接的な縛りが掛かる。来週の会合前後にかけては、長期金利の変動幅再拡大を含めた「政策修正の遅延」思惑が、円高抑止や円安につながる可能性もある。

＜リスク選好の株高・円安、持続と過熱調整を見極め＞

日本市場では5月12日前後から、株高とリスク選好による円安が同時進行となっている。前週末からは、米国での債務上限合意案の進展や雇用統計の底堅さなどがリスク選好を後押しさせている。目先は株高・円安の持続余地と、反動的な過熱調整による株安・円高を見極める展開となる。

円安に関してはシカゴIMMの投機的な円先物ポジションが、5月30日週時点で－9万6193枚のネット円ショートとなっている（国際通貨市場、非商業部門）。前週の－8万0660枚を含めて、3週連続で円の売り持ちが増加。昨年10月以来の大幅な円ショートになってきた。目先は直近の円ショート最大である昨年10月25日週の－10万2618枚などに向けて、一段の円の戻り売り（外貨押し目買い）による円ショートの拡大続くか。あるいは過熱調整による円買い戻し（外貨売り）と円ショート縮減に転じるか。日々、手探りで見極めていく神経質な展開となる。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。